

# 秋の登山教室

# NPO 芦安ファンクラブ通信

第28号  
秋号

NPO法人  
芦安ファンクラブ  
南アルプス市芦安  
芦倉 1589-8  
事務局：(大滝)  
055-288-2531

第一七回秋の登山教室は二〇〇三年の台風のため小屋止まりで終わった鳳凰山の再挑戦でした。ところが、女心と秋の空は、またしても秋雨前線を本州南海上に停滞させ、出発からあいにくの雨模様となりました。しかし、これを物ともせず参加者二一名とスタッフ二三名は雨の中、天気回復を期待して鳳凰山を目指しました。

一日目、夜叉神の森を出立時には参加者の気迫に空が尻込みしたのか霧雨模様。身体が熱くなるにつれて顔や手に降りかかる水滴が心地よくさえも感じられました。夜叉神峠では霧で見えない日根三山を想像しながら休憩をとりました。これから先の母平までの長丁場は亜高山帯特有の苔むしたシラビソ林の中を進みます。

途中、今回の講師である三宅先生から普段なら見過ごしてしまう「重山稜」の山容形態の現地説明を受け、見晴らしの利かない樹林の中だからこそ楽しめる山の歩き方を教わりました。何といっても今回の登山教室のメインテーマは「鳳凰山の成り立ちと花崗岩」ですから、歩きながらお話が聞けたことは本当に有意義でした。

止むことのない雨の中を五時間かけて南御室小屋に着き、冷え切った体を小屋が用意してくれてあったストーブで温めながらホッと一息しました。



三宅先生による小屋での座学風景

まもなく始まった三宅先生の講座は、先生の巧みな話術や実体験などからの興味深い話に全員が引き込まれ、さらに雨音が心地よさを奏でて授業内容にも共鳴し、それは楽しい現地講座となりました。

一日目、昨夜就寝の頃には止んでいた雨が夜半からまた降り始め、出発の時間になっても一向にやむ気配をみせません。雨のご希望者を募り、薬師岳まで行くことにしました。一一名の方が希望し、スタッフと共に雨の中を出発しました。稜線に出ると、砂払岳の奇岩峰と湿った花崗岩の砂礫を背景にして、タケカン

バの黄色、ウラシマツツジの赤色、ナナカマドの赤色、ハイマツの緑色が目に飛び込んできました。鳳凰山の秋を瑞々しく醸し出し、霧も漂い幻想的な雰囲気を作り出していました。

薬師岳頂上に立つと、霧の向こうに観音岳が見えては隠れ、と神秘的な情景でした。その観音岳に後ろ髪を引かれながらも安全のため後にすることにしました。帰り道、薬師岳小屋で温かい飲み物を頂き、皆さんの感想やら山談議に楽しいひと時を過ごしました。南御室小屋止まり組も、ストーブを囲み三宅先生の続編講座を聞かれ、こちらも充実した時を過ごされたと聞きました。

午後三時過ぎ、二日間の雨にも負けず三四名全員が無事に夜叉神峠登山口に戻って来ました。



薬師岳山頂でハイ、パチリ！

近年旅行会社が企画する中高年向け登山ツアーが盛んである中、芦安FCの登山教室では発足以来、座学と実践を組み込んだ現地での登山教室を目標に開催しています。継続して参加される方も多く、一七回目ともなるとスタッフと参加者の皆さんとの絆も太くしっかりとしたものになりつつあります。登山の行動中は、適度な緊張の中にも和気あいあいとしたグループ行動が実現できました。我々が目指す登山教室に一歩近づいたかなと喜びを隠しきれません。今回の登山教室では南御室小屋には大変お世話になりました。昼食も小屋の計らいで温かい丼物を頂きました。薬師岳小屋、南御室小屋の皆様お世話になりました。最後にありがとうございました。雨の中お疲れ様でした。そしてご参加ありがとうございました。

芦安ファンクラブ 渡辺&花輪



芦安山岳館で全員集合

## 間ノ岳三角点改理事業始末記

昨年の北岳（白根岳）（三一八九）山頂三角点改理に続き、隣接している間ノ岳（三一八九）の三角点改理が平成一九年九月二十二日～二十四日に掛けて実施された。

昨年の時も天気と資材の空輸には相当冷や汗をかきながら準備を進め、作業当日にヘリがガスの中からひよっこり資材を運んでくれた為に事無きを得た経過があった。自然相手の作業の厳しさは少しは知っているつもりだった。春から念入りに、国土地理院や南アルプス市との協議が行われ、イメージやシミュレーションは十分過ぎる程度認できた。今回の作業は北岳山荘を拠点にする事になり、宿泊経費は市の支援が得られ、大いに感謝である。



懸命な荷上げ作業

八月二十三日に資材を梱包、準備し明日の荷上げを待った。しかし朝になるとヘリの運行許可がまだ降りていないとの事で未遂に終わり、せつかく積んだが、荷下ろし（車上から）になった。九月四日、空輸の準備をし、五日に広河原で待機するが天候不順の為、ヘリは広河原へすら来ることが出来ない。九月八日天気は大分良いので期待して広河原へ運ぶ。広河原に行ってみるとヘリポートへの資材運搬路は昨日の台風の水で流出して通行出来ない状態になっている。慌てて、周囲のバツクホーを借りて何とかしようと試みるがバツテリー切れの為、エンジンがかからない。やむなく他の車のバッテリーを借りて作業できる状態になった。資材運搬路の土砂排除や暗渠の開孔はヘリが来る前に何とか復旧出来た。しかしヘリは上空の強風やガスを理由に北岳山荘分（GPS用脚、標石、盤石他小物）百二十九kgしか荷を上げてはくれなかった。翌日何とか上がらんものかと粘るが十一時頃ヘリは立山へ飛び去った。

九月十四日広河原でヘリを待つが来ず。九月十六日も後が無い。今日はなんとしても上げてもらわなければ今年は見送る事になりそうだ。パイロットは来るなり「上空は強風だ、チャンスは少ない」と脅かす。

朝六時三十分、まずセメント、骨材の半分が間ノ岳に向かう。気のせいか、なかなかヘリが帰ってこない。しばらくして野呂川上流から降下してきた。ほっと、胸をなでおろす。しかし2便はやっとの思いで下ろしてきたようで三十分近くかかった。もう一つ頼むよ。

七時四十五分、長い荷上げが完了した。しめて千四百五十kg。しかしこの間に当初の計画した日程を2回も延期せざるをえなかった。その為に関係者や参加者にはスケジュール調整や休暇変更にも多大な迷惑をかけてしまった。



岩場の中、票石(60kg)を慎重に運ぶ

九月二十二日、待ちに待った作業実施日になった。国土地理院Y課長以下四名（地理院関係応援団三名）、神奈川県仲井町の職員一名、ファンクラブ関係参加者十一名は元気に広河原を出発し、一路北岳山荘へ通い入れた大樺沢を登る。器材を背負った地理院関係者と先行する人達の間が開いた為、先行隊に今日のうちに中白峰まで標柱と盤石を運んでくれるようお願いした。

この先行したツワモノメンバーは少人数にも関わらず、無事に中白峰まで行ってくれた。後での話だが大分苦戦を強いられたようだった。

翌朝、六時、北岳山荘からは借用した工具をそれぞれに分担し、まず標柱がデポしてある中白峰へ向かう。ここから間ノ岳への人肩運搬になる。なぜか誰の指示もなく六十kgの標石と三十kgの盤石のチームに自然に分かれた。

途中から一般登山者もこの行列に加わり数人の人が肩を入れて運搬に協力してくれた。時折休憩を入れながらも、結局、最後は本能的に競争になった。間ノ岳に空輸した資材は山頂から八十mくらい西に離れたならかな斜面にあった。まず、ここから山頂まで約一、五トンの全品を持ち上げなければ仕事は始まらない。地理院の方々は丁張を掛けたりの段取り、スタッフは少人数、山頂には多くの一般登山者。この環境をいち早く察知し、「みなさん、この百年に一度の記念すべき三角点改理の事業に参加しませんか！」とS女史の声が三一八九mに響き渡った。



資材は@25kgあった。



盤石、標石の設置は慎重に丁寧に行われた。

それと同時に堰を切ったように協力者がいつせいに資材に向かって駆け下りてきた。その中で拳を振り上げ指揮をとっている彼女の姿はさながら「間ノ岳のジャンヌダルク」といったところか。  
 標柱は半分に折れて定位置から離れた所にあつたが、GPS測量のポイントには寸分の狂いもなく百二年前に設置された盤石が現れた。敬意を抱きながら掘り起こすと、やはり古銭が出てきた。盤石や標石の微調整に使つたと思われる。低下改埋の為の掘削は思ったより岩盤が固く、金デコとツルハシでの苦闘が続く。限界を感じたところで床付をするが、彫つた深さはやつと四cmとは。北岳と同じく会員の名盤を納め、現在の貨幣を敷き、新しい盤石が座つた。位置と方位を念入りに確認し、続いて新しい標石が立つ。



新しい標石によりまた、間ノ岳の歴史が繋げられる

物珍しそうにカメラを向ける多くのギヤラリーの中で、周囲に鉄杭を打ち込み、鉄筋で幾重にも囲む。また、百年もちますようにと念じながら隙間に十分な量のコンクリートを流し込む。会員によるコンクリートの手練作業は一年ぶりだがなかなか手際が良くなつていいる。表面を自然石で覆い、地理院で用意してくれた記念プレートはコンクリートに埋め込み、作業は終わった。

記念撮影には、当日ここで日本百名山登頂達成者も加わり、大いに盛り上がり、記念が重なる。この作業の為に広河原から四時間程で来てくれた会員は帰りにはモッコを二つ、軽々北岳山荘まで運び日帰りで参加してくれた。いやはやすごいな。しかし実はこれから

が大変だった。旧標石、旧盤石、残材、使用器材、モッコなどを全て北岳山荘まで運ばなければならぬ。びつくりするような量を背負子に荷造り、担いでいたら、記念に、と言つて写真を撮られた人もいたほどだった。終わつてみると、今回も多くの方々の手助けや協力に救われた。地理院、南アルプス市はもとより、地理院応援隊の皆さんトマト料理と帰りの荷下げありがとつ。  
 神奈川県中井町から手伝いに来てくれた健脚Oさん、六十kgが背中で踊つていましたね。ありがとつ。  
 そう遠くない日に南アルプスの何処かでまた改埋の話が持ち上がったら、お願いします。長々書き綴つてしまいました。が、一番楽しんでいたのはもしかしたら私だったという事に今気が付いた次第です。

芦安ファンクラブ  
 清水(准)記



皆さんたいへんお疲れ様でした。

**紅葉の妙義山登山行**

十一月八日、秋の妙義山へ紅葉を求めて六名で登山行。妙義山は白雲山、金洞山、金鷄山の三つの山からなり、四国の寒霞溪、九州の耶馬溪と並んで、日本三大奇勝のひとつといわれる名山である。朝六時に蕪崎の奥合同庁舎前へ集合し、清里、佐久を経て、上信越自動車道に入り、軽井沢近くの松井田妙義ICで降り、妙義山の登山口にある道の駅まで、約二時間で到着。今日は快晴で、絶好の登山日和である。

道の駅からは、これから登る妙義山の鋭い岩峰が眺められ、最初の難関、大字岩峰の「大」の字がくつきり見える。すぐ近くの妙義神社の大鳥居をくぐって、さあ登山開始。最初から、かなりの急坂だ。大字岩峰の岩場を避け、初心者向けの中間道に入ることもできるが、そこはファンクラブのこと、迷わず岩場のある大字岩峰へ向かう。



すっかりした鎖で、足場もあり、わりと楽に登りきる。道の駅からは小さかった「大」の字も、近くで見ると背丈よりも大きい。岩峰からの眺望は素晴らしく、特に真近に聳える白雲山は、紅葉に映え圧巻のひとつ言。



ばれる小さな石仏があり、微笑ましい。

石門群へ向かう途中に大砲岩と呼ばれる岩峰群があり、手ごわそうだったが、みんなで挑戦した。岩場の上り下り、トラバースの危険箇所には鎖がかけられ、リーダーの指示を受けながら慎重に登った。岩峰の上は狭く高度感満点、眺望も三六〇度で、見上げる金洞山が大きい。慎重に岩場を下降して、石門群でも一番大きい第4石門へ向かう。ドーナツ状の巨大な石門を通過しながら、自然の不思議な力を感じる。

石門の窓からは、紅葉の中に大砲岩や口ソク岩が浮かび上がって見える。第四石門から、第二石門へと下る。この石門には、カニの横ばいと呼ばれる鎖場のトラバースがあり、最後のスリルを味わった。次の第1石門をくぐると、ほどなく奥道に出た。登山口から約六時間の山歩きで、紅葉の妙義山を満喫した登山行だった。

岩峰を降りてしばらく行くと鎖場の連続する上級コースへの分岐があるが、今回は一般コースの中間道へ降りる道をとる。何箇所か鎖場を越えて中間道の閑東ふれあいの道に出て、第一見晴に到着。ここからは、木漏れ日の中で紅葉を楽しむながらの快適な山歩きとなる。鎖場のある第一見晴からは、白雲山から金洞山までの迫力ある岩峰が見渡せた。中間道の中間点には、本読みの僧と呼

ここから車の置いてある道の駅までは奥道歩きになるが、リーダーの望月さんが、マラソンで車を取りに行ってくれ、感謝のひとつ言。途中妙義ふれあいプラザ「もみじの湯」で入浴。露天風呂から妙義山を眺めながらこの一日を振り返って極楽気分。帰りの上信越自動車道からは、左方向に夕焼けに染まる妙義山、その先右方向に浅間山を望みながら、もと来た道を帰路に着いた。



今回の会員登山は、初めての平日企画で、私たち観光業者には参加しやすかった。これからも継続してほしい企画だ。また八十三歳になるといつ清水百太郎さんは、みんなのペースに遅れることなく歩き通し、日頃の鍛錬の大切さを教えられ励まされた。妙義山も、標高一〇〇mほどの低山ながら、木々の紅葉も鮮やかで、各所の眺望もよく、なにより山そのものの存在が驚きだ。その上岩場あり鎖場あり石門ありと変化に富んだコースで、とても楽しく充実した山行になった。

芦安ファンクラブ 大滝要造 記

# 南アルプスサミットに参加して 世界自然遺産登録に向けて 立ち上がった10市町村の 取り組み

南アルプス市みどり自然課  
広瀬 和弘

南アルプスを世界自然遺産へ登録しようという運動が始まった。国内ですでに白神山、屋久島、知床と登録を果たし、先般、富士山が文化遺産として暫定リストに記載されるなど国民の世界遺産にかける想いが高まっている。

今、国内では文化遺産を含め、地域が保有する候補地を巡って再び盛り上がりを見せている。「再び」というのは、実は自然遺産の場合、平成15年に政府の「世界自然遺産候補地に関する検討会」によって国内の候補地の選定作業が行われている。その結果、「登録基準に合致する可能性が高いと判断された地域」として、知床、小笠原諸島、琉球諸島が暫定リスト記載への候補地として挙げられ、2005年には晴れて知床が世界自然遺産に登録されたのである。肝心の南アルプスであるが、最終的に19の候補地のなかには入っていたが、残念ながら落選してしまった。

あれから4年が経過し文化遺産を所管する文化庁では全国の自治体から世界文化遺産候補の推薦を受け付けるなど、政府の取組みも変容した。ちなみに自然遺産を所管するのは環境省で、知床が登録された後は、先般小笠原諸島が暫定リストに記載され、残されるのは琉球諸島のみとなり、近々検討会

が開かれるのではないかと憶測がよぎり、南アルプスをはじめ、地域間の取り組みや要望活動が活発になってきているのである。

南アルプスはご存知のとおり、昭和39年に南アルプス国立公園に指定され、年間60万人の利用者があるという。他の国立公園に比べれば利用者は決して多くはないが、実はそこに南アルプスの魅力が隠されている。

緑の山岳地帯と呼ばれ、周囲を急峻な谷によって形成された南アルプスはアクセスも容易ではない。しかし、そのことが幸いしてか、手つかずの大自然が残されており、南アルプスにしかない希少種を含め世界的に誇れる財産が今もなお生き続けているのである。

こうした背景のなか、今年2月に南アルプスを取り囲む静岡、長野、山梨の10市町村が手を取り合い南アルプスを世界自然遺産に登録しようと推進協議会が設立された。南アルプスを地域の力で世界遺産へ登録するというひとつの大きな目標が誕生したのである。

そして去る7月28日静岡市のグラウンシップにおいて10市町村長が一同に介し、第1回の南アルプスサミットが開催された。

構成市町村は、南から静岡市、川根本町、早川町、南アルプス市、葦崎市、北杜市、大鹿村、伊那市、飯田市、富士見町の10市町村である。

これまであまりご近所づきあいがなかった近隣市町村がこの大きな山塊である南アルプスでひとつとなったことは非常に意義深いことだ。

当日はみなみらんぼうさんの基調講演から始まり、山登りの楽しみや南アルプスとの関わりなどを優しい口調で語りかけてくださった。そして、次に

各県を代表した活動が事例発表された。長野県では南アルプス研究会が「仙丈ヶ岳における水質調査と環境教育」、静岡県では南アルプス高山植物保護ボランティアネットワークが「南アルプスにおける高山植物の現状について」を普段の活動や科学的な分析などを通して南アルプスが今抱える課題や展望が報告された。



北岳にしか咲かないキタダケソウ、世界の南限に生きるライチョウ、大空を悠々と飛ぶイヌワシ。南アルプスの大いなる山容は多様な生物を育み、私たち人間にも大きな恵みを与えてくれている。しかし、その一方でここ数年、南アルプスには様々な変化が見られるようになった。二ホンジカや二ホンザルの高山帯への侵入、それらに伴う高山植物への食害、さらに希少種の減少など、これまでとは何かが違った現象が起きているのである。

現在地球規模での生態系への悪影響が懸念されているが、仮に地球上で人間が種の頂点であったとしても私たちを取り巻く多様な自然環境は私たちが生きていくためにはどうしても欠かせない重要な役割を担っている。単一な自然環境のなかで私たち人間は生きていけない。「生きる」ということはどういうことなのか、どうやら真剣に再考する時代が来たようだ。

南アルプスが世界でオンリーワンになるための作業は始まったばかりである。これからはこの南アルプスで地球誕生の歴史を紐解く作業が必要だ。まだ多くの秘められた地球の歴史が眠っていることに期待をし、学術的に南アルプスの評価を高めていかなければならない。そして、一方でこの推進協議会を契機に南アルプスを抱える関係市町村の人々が地域を見つめ、そして守り続けて交流することに、豊かな日常が見えてくるだろう。

これからの南アルプスはより地域を楽しませてくれる題材である。

イギリス旅行の想いごと

北杜市 井口和江

五月二十日、私達夫婦は十二時間の空の旅でヒースロー空港に着いた。娘夫婦が迎えに来てくれて、ロンドン市内の彼等の家に向かった。大きい通りは、太い街路樹が続ぎ、家々は古くそして美しい。彼等の住いも築六十年とか。オートロックも無くて管理人が玄関にスーツ姿で座っていた。九階の部屋からは街並みが良く見える。通りの一番奥にはギリシヤ大使館があり、国旗がはためいていた。

二十一日、すぐ前にあるホランドパークを散策したが、広くて木々が茂りサッカー場やテニスコートなどがあり良く手入れされた美しい公園だ。小学生がサッカー場の隅で体育の授業をしていた。

二十二日、地下鉄を乗り継いで、キユーガーデンへ行った。とても良い天気気分良く歩き廻った。大きな木々と美しい芝生の中に巨大な温室が何棟もあり、熱帯の植物や砂漠の植物、それに水辺の植物と、世界中の植物が集められている。池には水鳥が泳ぎ、公園の脇をテムズ川が流れていた。バラには少し早かったが、石楠花は数多くの種類を見ることが出来た。園内の木々は全部で1万4千本あるのだという。

二十三日、バスで大英博物館とナショナルギャラリーへ行く。エジプトのミイラをはじめ、中東、ヨーロッパ、中国など世界各地の古い物が数多く展示されていて、興味深い。紀元前の物も沢山有り、よくも集めたものだと驚

くばかりだった。イギリスの子供達の校外学習の場らしく子供の団体が多い。ナショナルギャラリーの本館は、古典、宗教画が多かったが、別館には、ゴッホ、マネ、セザンヌ、モネなど見たかった画家の絵が多くあつて満足した。



新宿にあるゴッホの《ヒマワリ》と同じヒマワリの絵もあった。最近日本に行つたというガイドのおじさんに話しかけられた。奈良や箱根に行つたそうだ。

二十四日、娘夫婦と二泊三日で、ウエールズ地方へ出掛けた。ロンドンからカーディフという町まで特急列車で二時間、広々とした田園風景の中を行く。カーディフの町は、海が近く駅前をカモメが飛んでいた。ここでレンタカーを借りてブレコン・ピーコンズ国立公園へ向かうが、途中には広告の看板など一切無く、低い生垣に囲まれた牧草地の中の道路を幾つかの丘を超え美しい湖のほとりを通りながら、一時間半ほどで、古い領主の館を改築したというホテルに着いた。ホテルの窓からは、ゆるやかな川の流れと、羊のいる丘が見える。庭の楓の木の下面には、リスや野兎が走り回りコマドリが芝生で餌をついばんでいる。ホテルには日本人の女性が働いていた。

二十五日、少し山の方に向かい、滝見のコースを歩き、放牧された羊の群れを追いかけたりし、またそのお肉(ラム肉)を美味しく頂いた。

二十六日、天気が悪く寒かったが、ピルフェスタをのぞいたり、お土産をさがしたりしてからカーディフ戻つた。カーディフには古いお城が残っており、塔に登つて、街並みを眺めてから町の中を散策した。休日だったこともあり街はとにもぎやかで人があふれていた。

五月のイギリスは木々が深々と茂り、丘はうねうねと緑が続ぎ、とにかく美しく誰をも詩人にさせそうな気配だった。

ロンドンの街中のハロッズも各種ブティックも魅力的だったけれど、貧乏旅行には、眼に毒な感じである。それでも自分用にカシミヤのマフラーを一枚買った。帰りの十一時間の飛行はエコノミークラス症候群発生寸前の辛い思いをして十一日間の旅行を終えた。

四川省の成都から北方二五〇<sup>キ</sup>、周辺に五〇〇〇ミクラスの山が数多く聳えている。

世間の登山者には余り知られていないが、山梨では最近往日している地域だ。

この夏に、理県の雪隆包山（五五二七m）、黒水県の奥太基山（五一八六m）に登りに行った。

雪隆包山は登山口の上孟郷（二二〇〇m）まで成都から車で一日掛り、宿に泊まりポーターの手配を済ませた。

翌朝ポーター十三名に荷物を背負ってもらい二日掛りでBC（四一〇〇m）迄登った。そこから下部岩壁帯（四三〇〇m）を乗越し中間のガレ場を登ると、氷河（四五〇〇m）になった。この氷河は傾斜が急で氷が堅く、やむなくルートを氷河と右側岩壁との中間のクローアルに求め、落石を注意して登った。やがて右壁に行く手を阻まれ（四

七〇〇m）、氷河に取り付いた。シュルンドやクレバスを回り込みながらルートを伸ばしたが、スクリューハーケンが足りず四八〇〇m地点で登り続けることを断念した。ポーターに上がって来るよう連絡を出し二日間を休養にあてゆつくりと過ごした。雪隆包山は、連日の雨、四五〇〇mから上部にかか

る濃いガス、氷河が急で堅いこと、ルート上に落石が多いことなど、条件が悪い危険な山であった。情報不足で装備が不十分で残念であった。

次の奥太基山へは上孟郷から車で一日掛り、黒水（三二〇〇m）迄移動

した。翌日、登山口（三三〇〇m）まで小型の車に乗り換えて行った。そこから馬十二順に、荷物と我々が乗って二日掛りでBC（三九〇〇m）に着いた。当初の目標は奥太基山であったがこの山は岩壁に囲まれた岩山で、ここも装備不足のため隣の奥太基山（五二一〇m）に変更した。

朝まで雨が強く降っていてアタック断念かと思っただが、急にガスがうすれ雨も止んできたので出発した。ルートは奥太基山と奥太基山とのコルを指し沢に沿って登った。コルからは岩が折り重なったガラガラ斜面をひたすら登るだけで難なく頂上に着いた。頂上には経文が書かれた古い旗が風に吹

かれていた。我々も同じような旗を竿に結び付け風になびかせ安全を祈願し下山した。翌日BCから黒水まで下山したが、馬に乗りっぱなしで尻が痛くなった。

雪隆包山を早く切り上げたので日数に余裕ができ、小全県の日隆に行くことにして二日掛りで移動した。ここは四姑娘山の麓で最近観光地として発展している所だ。



二姑娘山に登ろうと、登山協会に連絡し登山許可を取り、現地のガイドを雇い、馬でBC（四三四〇m）に入った。翌日は鋭い山頂を目指し長い斜面を沢に沿って登り、途中から右に斜上している狭いルンゼを登ると広々したプラトリーになり、そこでゆつくりと休んだ。

そこから一気に三姑娘山とのコルに登り、狭い稜線を山頂に向かった。上部は両側が切れ落ちていたためロープをフィックルとして登ると鋭い岩先の頂上に着いた。BCが遙か下に見えるが直下は垂直に切れ落ち目が回るような高さで、全員ロープで固定し動きはままならないが記念の写真を撮ったりして登頂を喜んだ。

BCから日隆までの下りは荷物を馬に乗せ、我々は歩いて下ったが長い道程であった。八月十三日の出発から九月二日の帰国迄二十一日間、中国国内を動き回った山行であった。芦安ファンクラブ 井口 功



この記事は昨年中に編集者の手元に届いていたのですがFC通信の頁編集の都合により今日に至りました。ご了承ください。

# 富士見の池歴史浪漫 赤石岳へ飛ぶ

芦安ファンクラブ 渡辺典美

今回の会員山行きは

- 一千万年遙か前に海底から隆起を始め、現在も一年間に4～5ミリメートル上昇を続けている赤石山脈。
- 古の時代から「雪白き甲斐の白根」と和歌に詠われていた、赤石山脈。
- 戦国時代には、その急峻な高山の山脈は自然の要塞となって、甲斐と美濃その先の京の都を分け、戦国最強軍団を育て上げ「明日は瀬田の唐橋にわが軍旗を立てよ」と信玄公が発した。

赤石山脈の宗家、赤石岳に登り、その隣に連なる荒川三山も2泊3日で踏破しようという強行作戦であった。

▼ 私は、この機会を利用して自分なりの研究課題を实地踏査で確かめようと、秘めたる目的を持ち、気負って出発しました。

その目的とは、

武田信玄公の正室、二条夫人の菩提寺である円光院

境内の「富士見の池」は伝説によると【信玄公は池に映る富士の山容雲行で天候を占って出陣、退陣の駆け引きとされていた】という。 「ふるさと甲府の昔話伝説世間話」



周囲の地形上、富士山が映るはずもない、この池に富士見池となんで名付けたのか？素朴な疑問を持ち続けていたとき、甲府盆地を木枯らし一号が通り過ぎた秋晴れの日の朝、富士見池に行き西の空に聳える遙かな峰々の、その先の赤石岳を眺めると3000M峰に初冠雪が降り、まさに富士山頂とみまごう赤石岳の嶺が見られた、望遠鏡で覗くと雪と岩肌の織りなすコントラストから山頂には富士山頂の剣ヶ峰があり頂し直下には大沢崩れまでそっくりでした。



今回、小赤石岳から赤石岳に登り詰め、私の課題は解けました・・・後述



**荒川三山と赤石岳踏破** (2007年8月24日(金) 2日目)

早朝、千枚小屋を出立し千枚岳頂上(06:13)では霧のため展望なし、でも頂上への10分前に、昨日小屋まで寄り詰めたコースが一望できて、「よくもここまで来たものだ」と感心してしまいました。

千枚岳から丸山に向かう稜線は風強く、体感温度は5度位だろうか手袋の中の指先が冷たい、稜線の道中では、白く背の高いシシウドとピンク色のタカネナデシコが咲く中でマツムシソウが、どこまでも澄んだ紫色をして満開、ここのマツムシソウは甲で咲く花に比べて花が大きく背が低い、きっと咲く時期が周りの花に比べて遅いのでトリカブト、ナデシコに負けてはならぬと精一杯虫を引き寄せているのだろう。ふり返ると、千枚岳頂上からの美しいアップダウンの稜線が目に飛び込んだ(06:50)

丸山から悪沢岳の途中稜線の岩場道、岩の割れ目にイワギキョウが今を盛りと咲いている、まさに「私がイワギキョウ」と誇っているかのように、ここでは珍しい白色のイワギキョウを見た。メンバーは皆初めてだ、と言っていた  
(07:25)

荒川三山の東岳に着いた、この頂には荒川東岳・悪沢岳・東岳と一つの名前がある、山頂から北面はガレた岩場がどこまでも下り、覗き込むと地獄への恐怖を感じた、だから悪沢と言う、と聞く(07:48)

荒川中岳に向かう途中、ツガザクラの中にミヤマヤハズハハコと並んでチングルマの実が綿毛に霧露を光らせて素敵に「風車」となって僅かに揺れている、チゴグルマ(稚児車)という名前の由来のように。



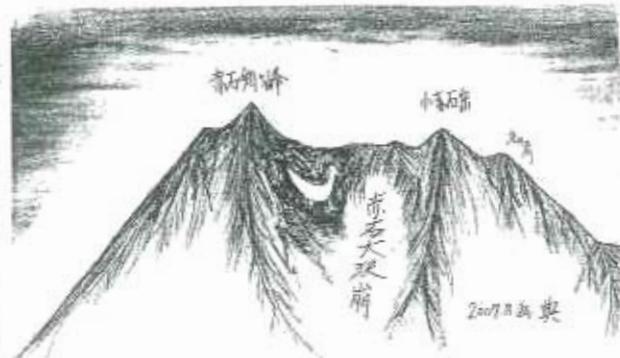
荒川中岳では、目の前に今回目的の赤石岳が現れる、中岳をとり分岐にザックを置いて荒川前岳へ20分で行って返す、3000Mの稜線はハクサンフウロ、マツムシソウが満開で、里はまだ猛暑であろうに、一足先に秋を感じ取った。「これ贅沢の極めなり」これから荒川小屋まで400M下り、それから500M登りの赤石岳に向かう(09:45)

荒川小屋からちよと登りトラバースして赤石岳北面の登りに取り付く、見上げると、これから登る赤石岳の北壁がそびえ立ち、空はどこまでも青く、西から吹きつける風は、燃える心と身体をここちよく冷やしてくれている。きつと甲府は猛暑だろうなあ・・・「この夏休みありがたきかな」(11:10)

ここは大聖寺平です標高は2700M余り、これから登り2時間弱をリーダーは予測する。赤石・大沢岳を通過、小赤石岳に取り付く、これからはキツイ。見上げると、この急登は富士山頂の直上よりキツイ(11:35)しばらく登るともっとキツクなり稲妻返しを繰り返す、これからは直登、私の経験では初の挑戦か?(11:45)あと1000Mが更に急、両手を使い登り切ると(12:03)ここは小赤石岳の北の肩だった。しばらく小赤石を前に見て登り山頂3081Mに到達した(12:20)

▼ 小赤石岳から僅かに下り分岐にザックを置き、空身となって赤石岳山頂に向かう(12:40)小赤石岳と赤石岳のコルが赤石沢と、この目で確認した。円光院の富士見の池から富士山の大沢崩に見えるのは、この赤石沢であった。私が小赤石の【北の肩】と言ったのは赤石・大沢岳からの急傾斜の登り切り、私は勝手に赤石コルを【赤石大沢崩】と名付けました。

この赤石沢は本当に赤色の石で形成されていて、一千万年遙か前、海底で静かに積もったプランクトンが固まった石(ラジオラリア石)だという。



念願の赤石岳3120Mへ登頂(13:00)頂から南に20M下っての平地に避難小屋がある、その先は富士山の傾斜角度で斜面が下るので、私は、この頂を【赤石剣ヶ峰】と名付けることにした。

この頂こそが地球上で最初に隆起を始め、南北の連山を引っ張り上げてきた褶曲山脈の頂点。

ここに立つと、世界中で一番速い速度で地表から天空に伸びている人になる、まるで「ジャックと豆の木」のように。

▼ 剣ヶ峰からの帰り、赤石沢には残雪があり、なんと、この雪形は白鳥が甲府へ向かって飛翔しているのではないか、もしかして農鳥岳の白鳥が卵を二つ残して飛び立った後、雛達はこの赤石沢で育っていたのだろうか・・・?この白鳥はジャックが持ち帰った鳥のように金の卵を生むのかもしれない・・・と想いをめぐらせました。

▼ 分岐から再度ザックを背負い、今夜泊まりの赤石小屋(2500M)まで下り始める、途中リーダーに「下綱ぎみですから小屋に先着します」と断って、一気に下山する。実は来年正月の「上野原駅伝」ドリエース区間のポジション争いのため膝筋肉のトレーニングを試みようと思ったからでした、リーダー ”ごめんなさい”

赤石小屋着(15:30)これからが楽しい、川小屋テラスでの宴問答・・・

#### 後述

毎年6月中旬に南アルプス農鳥岳に現れる、残雪の白鳥が農鳥岳の名前の由来であり、明治のころ小島島水が野尻抱影にメモ書きで宛てた手紙が日本山岳史資料として保存されています。

私は、この白鳥を古府中町(こうふなかまち)の円光院境内、富士見の池から眺めるのが楽しみの一つとなっています。

円光院は、信玄公の正室「三条夫人」の菩提寺として夫人没後に信玄公が躰觸ヶ崎の東に創建した寺です。三条夫人は公家の一条家から山深き甲斐の国へ嫁ぎ京の都と甲斐、駿河の架け橋となった高貴な御方、

甲斐へ嫁いでからは躰觸ヶ崎館の北曲輪から、お供の者を連れ立ってここに来て、京の都と甲斐の国を分ける西に巻える雪白き赤石山脈を郷愁の想いひとしおで、眺めては笛を吹いていた

と云う

「星女・一条草子」(高野賢彦 著)

富士見の池から、西の虚かな峰々をながめると、初冠雪の赤石岳は、富士山頂とみまごうように、楡形山(人井夫人の生誕地)と源氏山(信玄公そのもの)の合間の上空に現れる。今回、赤石岳を実地踏査し富士山頂として円光院から眺められる理由が、赤石山頂の地形から解明できましたので、私の秘めたる課題は自分なりに実証されました。

すなわち、

八幡大菩薩が赤石の嶺に授けた水滴は、赤石沢から甲の沢を抱え込み人井川の流れをつくり出し、大海へと導く、その時、信玄公は「明日は頼田の唐橋におが軍旗を立てよ」と発しているのです。

そういえば

神話の世界では、鳥は死者の魂を大に運ぶ使者であると言い、特に白い鳥(スワン)は高貴な御方の魂を運ぶとされている。

きっと、農鳥岳の白鳥は三条夫人の魂を赤石岳の天空に運ぶ役目があるために、南に向かって羽ばたいているのだろう、私は今回、赤石沢で白鳥が甲府に向かって飛翔している古形を発見した時、胸の高まりを抑えることが出来なかった、もしや、赤石岳の天空に運んだ白鳥が今、甲府に返しているではないか、との思いに至ったのです。なぜならばNHK大河ドラマ「風林火山」は今まさに佳境に入っているからです。

#### 【8月14祈りの日】

毎年7月から8月にかけて、お盆前に、この残雪は白鳥となって甲府の菩提寺へ三条夫人の魂を赤石の天空から運ぶ役目を担い400余年に渡って続いていると思ったとたん、すごい場面を発見したと、胸が熱くなり目まいを感じました。

『南アルプスは奥深く、懐が広い寛大な母なる山のような、これも一つの理由かもしれない』

### 紅葉祭りは手作り

第五回南アルプス市芦安紅葉まつりが十一月四日(日)に行われた。まだ早いかなと思われた紅葉も、それなりに美しく「咲いて」、天気も上々と申し分の無い背景の中で、沢山のお客さんも集まって賑やかに開催された。紅葉まつりは、芦安村の頃から、村ひと参加のお祭りとして「手作り」をモットーに実施されて来た様に思う。

舞台では、いつ聴いても感動する夜叉神太鼓に始まり、地元の元乙女たちによるフォークダンス等、芦安らしくほのぼのとした光景が繰り広げられた。またテントでは、村のおばちゃん(一部お姉ちゃん)達による手打ちのそば、機械製作ではない手作りのまんじゅう、チロル学園の子供たちによるトン汁、等々、手間ひま掛けたおもてなしの心で、祭りをささえて行くやり方は大事にしたいものだ。

わが芦安ファンクラブのメンバーも、有志(伊東氏いわく暇な人)が前日から、和菓子の「清月」の工場をお借りして、清潔な環境の中、計量や練り混ぜ等に機械を使い、尚かつひとつひとつの手作りの部分を残しながら、約六百個を準備した。

蒸かす前は多少いびつであつても、蒸したとたんふつから柔らかく、とても暇な素人の作とは思えない出来ばえに、一同驚きと満足の声をあげた。

ひとつ反省点として、蒸かす前の卵白の塗りが弱いとひび割れが出来やすい事を学習した。

それにしても、味噌の風味(蒸かしたてが最高)と、あんの甘さとの加減

も良く、仕上げは上々、自画自賛!

祭り当日の販売も、きれいなお姉さんたち(伊東氏いわく)の頑張りも有つて、お昼過ぎには完売し、来年の予約まで来る有り様に皆にっこり。紅葉祭りが終わると、山も村も、冬支度に入る。

芦安ファンクラブ清水毅記



今年もたいへん良く出来た味噌まんじゅう

いつもながら盛況のそばコーナーは早々完売



### 編集後記

近年、たいへん喜ばしい事ではあるのですが、私共芦安ファンクラブの事業が飛躍的に拡大且つ充実してきた為に、このファンクラブ通信の頁の中心も様々な味付けになってまいりました。山々を歴史的な観点から切り下ろす文豪もいれば、海外遠征や国外への研修なども多く見られ、記事の内容もたいへんバラエティーに富んでまいりました。

おかげさまで、編集者の悩みの一つでありました、「記事が無い!」「頁が足りない!」は解消されつつあります。しかしながら春から秋に掛けて途切れることなく続く事業により通信も「春夏号」とか「夏秋号」になり易く、ちよつと旬を逸した内容になっているのが現状です。昨今IT化によりパソコンやインターネット上ではたいへんな量の情報が東西南北や標高差に関係なく流れ動いています。ですが、いざ検索とかの段階になると、小さな情報や印象の薄い事柄はとんでもない後回しになっていたりしてなかなか世間には出にくいようです。そこへいくと、この通信は時間ばかりですが、見たい人の手元に届く確実な情報としてこれから周囲の迷惑を省みず続けていきたいと思えます。そこで提案ですが、現在は殆ど会員が負担にならない程度に記事を書き、集計編集して発行していますが、今後は賛助会員の皆さんや関係する知人、友人の記事なども掲載する事が出来れば一方通行の発信だけではなく素晴らしい相互交流「紙面チャージ」が可能になります。H・Pの掲

示板に書き込むような気軽さで是非、試みてはいただけられないでしょうか。そうは言っても、無限域の多様性には対応出来ませんから、ストライクゾーンはこちらで決めさせていただきますがね。

もつと今年も終わり、新しい年の足音が大きく聞こえてきています。私共の十二月の定例会兼忘年会では「還暦」に関する話題があちこちで飛び交っていました。現役の人もいれば、私は来年、私は再来年……。まるで心待ちにしているかのような笑顔での会話仲間と元気に山歩きや活動が出来れば歳はあまり関係ないようですね。

我会の最長老の百さんは、八十三歳になります。そこいらの若いもんにはまったくひげをとりません。秘訣は毎日行っている、地の利を生かした高低差三〇〇mの歩行鍛錬だそうです。来年はねずみ年です。身も尻も軽くして軽いフットワークに務めましょう。では良いお年をお迎えください。

事務局一同



干支にはワシの年はありませんが未永くよろしく